



農事普及だより

(5月号 平成29年5月1日～5月31日)

(発行) 鶴田町／鶴田町農業支援センター／鶴田町産業観光課
つがるにしきた農業協同組合鶴翔統括支店
西北地域県民局地域農林水産部農業普及振興室
(編集) 西北地域県民局地域農林水産部農業普及振興室



天候

(平成29年4月25日 仙台管区気象台発表 東北地方3か月予報より)
天気は数日の周期で変わることでしょう。気温は、平年並または高い確率ともに40%です。



水稻

健苗の適期田植え、適正施肥で、「買ってもらえる米づくり」を進めましょう。

1. 育苗

(1) 温度管理
5月は気温が高くなり、ハウス・トンネル内の温度も高くなるため、積極的な換気に努める。
降霜や低温が予想される場合は、被覆資材やストーブなどで保温する。

■温度管理の目安

葉数	温 度
出芽揃～1.5葉	日中30℃以下、夜間5℃以上
1.5葉～3.0葉	日中25℃以下、夜間5℃以上
3.0葉～3.5葉 (田植え)	日中20℃以下、夜間5℃以上 田植え5日前には、霜注意報発令時や強風の時以外は、できるだけ夜間も外気に慣れらし、丈夫な苗に仕上げる。

(2) 水 管理

ア ポイント
・かん水する目安は、床土が乾き、苗の葉が巻き始めた頃。　・かん水は午前中に行い、箱底まで届くようにたっぷりかける。
イ 留意点
・ハウス内が過湿にならないよう注意する。　・機械的に毎日水をかけると根の発育不良、軟弱苗の原因となる。
(3) 追 肥
・葉色が淡くなったら、1箱当たり硫安5gを水500mlに溶かして追肥し、よく葉についた肥料を水で洗い流す。
・なお、追肥作業は、かん水を兼ねて、肥料ヤケが起きにくい早朝や曇天に行うのが望ましい。

2. 本 田

(1) 畦畔の補強

・畦畔にネズミ穴などがあると水持ちが悪くなり、除草剤の効果が劣ったり、低温時の深水管理が十分できなくなるので早めに補強する。

(2) 基 肥

・昨年、穀物倒伏したり、いもち病が発生した水田では、窒素量を減らす。

・窒素量が多くなると、食味・品質の低下や倒伏、いもち病等の原因となるので地帯別、品種別施肥基準を遵守する。

■施肥量(窒素分量)の目安(中苗移植)

品種	施肥体系	窒素総量(kg/10a)	基肥(kg/10a)	追肥(kg/10a)
つがるロマン	表層1回追肥	6～8kg	4～6kg	2kg以内
まっしぐら	表層1回追肥 表層2回追肥	6～9kg	総量の7～8割 総量の8割	総量の2～3割 1・2回自ども2割
青天の霹靂	・窒素総量は「つがるロマン」より1kg/10a程度減じ、表層1回追肥体系を原則とする。 ・転作後の復元初年目の水田は、施肥による生育コントロールが困難なので、作付けしない。			

(3) 代 か さ

・高低差による生育・除草ムラが生じないよう、均常に仕上げる。
・稲わらをさき込んだ水田や、田畠輪換田等の作物残渣がある水田では、稲わらの埋め込みをよくするため、代かき時に水を入れすぎないようにする。

(4) 田 植 え

・日平均気温が13℃以上になるとさを目安とする。(五所川原アメタスの平年値では5月13日以降)。

・代枯れ防止と活着促進のため、強風の日は避け、温暖な日を選ぶ。

(5) 田植え後の水管理

・田植え後は直ちに水を入れる。
・初期生育促進のため、低温時は苗が冠水しない程度の深水管理、高温時は浅水管理とする。

・昼間止水・夜間かんかいを基本とし、掛け流しはせず、水温を上げるようにする。

(表) 水管理の目安

生育期	暖かい日の水深	寒い日の水深
分けつけ期	3cm程度の浅水	5～6cm程度の深水

(6) 除草剤の使用方法

・除草剤は、前年発生した雑草を考慮して選び、使用基準を守る。
・除草剤を適正に使用しても特定の草(アセバ、ホタルイ等)が大量に残る水田では、抵抗性雑草が発生している可能性があるので、これらに効果のある除草剤を選択する。

・初期・中期の体系処理の場合は、中期剤の処理が遅れないように適期に散布する。

・河川等の水質を保全するため、散布後7日間は絶対に落水・掛け流しをしない。

(7) 病害虫防除

ア イヌニズリウムシ

・移植前や移植時に除防をしなかった場合は、発生に応じて防除する。

・発生が多い場合には6月上旬頃に水面用剤を散布する。この時期の防除によりイネドロオイムシも防除できる。

イ 葉いもち

・取り置き苗は葉いもちの発生源となるので、補植が終わったら、直ちに処分する。

(8) 農業飛散防止

・育苗跡地で野菜等を栽培する場合は、苗に施用する農薬が土壤に浸透しないよう対策を行う。

りんご

黒星病重点防除時期の「開花直前」と「落花直後」の散布間隔は10日以内を遵守。霜害防止対策の徹底を。

県生育観測は(板柳町高増)のふじの発芽日は平年より2日早い4月7日、展葉日は平年より3日早い4月16日であった。開花予想は、今後、日平均気温が平年並みの場合、ふじの開花日は板柳町で平年より2日早い5月7日頃、平年より1℃高く推移した場合、平年より3日早い5月6日頃と予想される。

1. 霜害防止対策

開花前後は最も低温に弱い時期のため、霜注意報が出されたら、霜害防止対策を確実に実施する。

(1) 霜害発生危険度

花開着色期で2℃、開花始め～幼果期で-1.5℃くらいの低温に約60分遭遇すると被害が発生する。

降霜は、晴天無風で午後7時の気温が6℃以下の日の翌日朝に発生する頻度が高い。

(2) 燃 烧

霜注意報が出たら、自園の気温の動きを観察し、0℃になったら燃焼資材に点火する。

■燃焼法による防止

種類	利 用 方 法
A重油オイル缶	4リットル缶を利用する場合、10a当たり30缶以上を配置する。
霜 カ ッ ト	おがくず：灯油=2:1(容量)の割合で混ぜたものを2kgずつ袋に詰め、10a当たり40～60個を配置する。

※燃焼法を行う際の注意事項

- ・灯油の保管量が200～1000㍑：少量危険物貯蔵届出書の提出が必要
- ・〃 1000㍑以上：危険物取扱者の資格が必要
- ・所轄の消防署に「火災と紛らわしい煙又は火災を発する恐れがある行為の届出書」などを事前に提出する。

(3) 送風法(防霜ファン)

防霜ファンを設置している園地では、ファンの始動温度を2℃に設定する。寒気を伴ったときや著しく低温になったときは、防止効果が低いので燃焼法を併用する。

幼果期に降霜による被害を受けた年もあったことから、結果後でもファンのスイッチは切らない。

(4) 事後対策

開花期までに霜害にあった場合は、結実量を確保するため、必ず人手授粉を実施する。その際、めしへの被害程度を確認して授粉する。

2. 人手授粉による結実確保

マメコバチを導入していない園地では、安定した結実量を確保するために人手による授粉を徹底する。また、マメコバチ導入園においてもマメコバチの数少ない場合や不順天候が続く場合には、人手による授粉を行って結実確保に努める。

3. 摘花・摘果

良品安定生産のためには早期適正着果が重要であるので、摘花を積極的に実施する。ただし、降霜常襲地帯や開花期に不順天候が予想される場合は、一輪摘花の実施や摘花剤の使用を控え、えき芽花の摘み取りにとどめる。

(1) 摘花

①人手による摘花
弱い花そうやえき芽花等の不要な花そうは、全花摘み取る。

②摘花剤の利用

結実が十分確保されると見込まれる場合は、石灰硫黄合剤又はエコローキーを利用する。使用方法は下表のとおりである。なお、いずれの剤も展着剤は不要である。

■石灰硫黄合剤及びエコローキーの使い方

薬剤名	散布時期	本 剤 の 使 用 回 数	成 分 総 使 用 回 数	希 釀 倍 数	10a当たり 散 布 量
石灰硫黄合剤	満 開 後 (頂芽花の満開日とえき芽花の 満開日)	2回	—	100～120倍	350㍑以上
エコローキー	満 開 日 追加散布を要する場合はその2～3日後に1回	2回以内	2回以内	100～150倍	300～600㍑

注) 1 満開日とは7～8割が開花した日で、花びらの散り始めてもある。

2 マメコバチに対して害作用がないので、マメコバチ導入園で利用しても良い。

3 ミツバチ導入園で石灰硫黄合剤を利用する場合は、散布前にミツバチの巣箱を回収する。

4 エコローキーは、花そう葉又は新梢幼葉の葉縁部に掻き(葉焼け)症状が発生する場合がある。

(2) 摘 果

ア 人手による摘果

摘果は早いほど良いが、実まりが判別できない時期(落花10日～15日後頃まで)には、まず一つ成り摘果を行う。

ただし、つがる、デリックス系など年により早期落果の多い品種は、落花10日後頃までに一つ成り摘果を終える。

仕上げ摘果は、陸奥では落花15日後頃までに、他の品種は落花25日後頃までに終える。

イ 薬剤による摘果

ふじ、王林、陸奥、北斗、千秋、さんさ、早生ふじ、トキを対象に各品種の満開後2週間頃(ふじでは横径が10mm位の時)、紅玉は満開後3週間頃(横径が16mm位の時)にミクロテオボン水和剤85(1,200倍、展着剤加用)を、果実に十分かかるよう10a当たり350リットル以上散布する。

■標準的な着果程度

品 种	摘 果 の 強 さ (残 留 果 実)	着 果 率 (%)
紅 玉	3 頂芽に 1 果	33.3
つがる・ジョブゴールド	3.5 頂芽に 1 果	28.6
ふじ・王林・さんさ・きあお・トキ・早生ふじ・未希ライフ</		

(1) ツマグロアオカスニカム对策

発生の多い園地では、展葉直前（5月上旬）にモスピラン顆粒水溶剤2,000倍を散布する。

(2) 灰色かび病対策

新梢伸長期に多発が懸念される場合は、ボリオキシンAL水和剤又はEBI単剤（インダーフロアブル又はオノリーワンフロアブル）を散布し、新梢への被害を防止する。

(3) ベト病対策

発生が多い園地では、新梢伸長期（約20cm）にシマンタイセン、開花10日前（6月上旬）にアリエッティC水和剤又はキノンドー水和剤40を選択する。

また、発病葉や発病果房は見つけ次第、摘み取って処分する。

とうとう

霜害防止対策の徹底と結実確保に努めましょう。

1. 霜害防止対策

りんご同様、霜害注意報が出されたら、霜害防止対策を確実に実施する。

2. 結実確保

毛はたきやマメコバチ等による授粉を積極的に行う。毛はたきによる授粉は、5分咲き頃と満開頃に少なくとも2回は行う。

3. 薬剤散布

散布時期	基準薬剤	散布量 (kg/10a)
満開5日後 (5月上旬)	バズワード顆粒水和剤 又はオノリーワンフロアブル 又はラリー水和剤 又はオーシャイン水和剤	1,500倍 2,000倍 2,000倍 3,000倍
満開12日後 (5月中旬)	オーソサイド水和剤80 ダイアジノン水和剤34	800倍 1,000倍
満開25日後 (5月下旬)	オーソサイド水和剤80 ダイアジノン水和剤34	800倍 1,000倍

4. 灰星病対策

花腐れ防止のため、満開5日後の薬剤散布を遅れないように適期に行う。雨が多い場合は晴れ間を見て散布する。

5. オウトウハマタラミバエ対策

発生の多い園地では、満開12日後と満開25日後にダイアジノン水和剤34の代わりにアディオンフロアブル（2,000倍）を使用する。

6. 薬剤の使用上の注意

バズワード顆粒水和剤はぶどうの「シューベン」、「ハッファロー（アーリースチューベン）」、「ポートランド」など一部の品種で、軽微な薬害を生じることがあるので飛散しないよう注意する。



- (1) 灰星病対策
- (2) オウトウハマタラミバエ対策
- (3) 薬剤の使用上の注意

ブリーバリー

園地を見回り、清掃と害虫防除に努めましょう。

1. 病害虫防除

- (1) 園地の除草に努め、病害虫の発生源をなくす。
- (2) 害虫は見つけ次第、捕殺する。

2. 土壤の乾燥防止

- (1) 稲わらや糞殻、木材チップ、おがくさを株元に10~15cm程度の厚さで敷くことで土壤の保水力が高まるとともに、雑草を抑えることができる。
- (2) 乾燥しやすい場ではかん水を行う。降雨がない場合は、土が湿るくらい十分にかん水する。

大豆

適適期は種と初期雑草防除をしっかり行いましょう。

1. ほ場準備

転作田では排水対策として、ほ場周囲に明きよを掘る。

水稻作から大豆作に切り替える時は吉土石灰などを施用し、pH6.0~6.5を目指しに土壤酸度を矯正する。

水分が多い状態での事前耕起は、ほ場の物理性が悪化するので、乾燥した状態で作業し、回数も最小限に抑える。温害を受けやすいほ場では、うね立ては種等で被害を軽減する。

2. ほ種期・栽植密度

ほ種適期は5月中旬~下旬。栽植密度は鉢幅70cm前後、株間15cmの2本立てを基本とする。（ほ種量は10a当たり7~8kg）ほ種直後の多雨は、出芽率の低下や、初期生育の不良を招くので、気象条件に注意しながら作業する。やむを得ず、ほ種が遅れる場合は株間を詰め、ほ種量を増やす。

3. 施肥量

基肥は、10a当たり窒素成分量で2~3kgを基準とし、土壤条件、連作等を考慮し増減する。

4. 種子消毒とわい化病の予防

必要に応じて、下記の剤で塗沫処理を行う。

剤名	鳥害防止	紫斑病	わい化病
キヒゲンR-2フロアブル	○	○	×
クルーザーF S 3 0	×	×	○
クルーザーM A X X	○	○	○

5. 根粒菌の接種

大豆栽培初年のは場は、根粒菌の着生が悪く生育に影響するので、種子消毒後に市販の根粒菌を粉衣する。

6. 雜草対策

は種後速やかに土壤処理除草剤を散布する。ほ場の細土が粗い場合や、ほ場表面の水分が低い場合は効果が劣るので注意する。

小麦

1. 追肥

一穂粒数を確保するため、2回目の追肥を5月中旬頃の減数分蘖期（止め葉が全体の4~5割開いた時期）に行う。追肥量は、10a当たり窒素成分で2kgを基準とし、生育に合わせて増減する。

2. 排水対策

転換畠では出穗期以降の温害を防止するため、明きよの設置や排水溝の点検を行う。

3. 病害虫防除

赤かび病は、開花期から乳熟期にかけて、気温が高く温潤な天気が続くと発生が多くなる。そのため、開花始めから開花期に1回目、その7日から10日に2回目の防除を行う。本病に感染すると収量や品質が低下するばかりではなく、本病のかび毒（テオキシナリノール）が付着した小麦を食用にするとトゲや蟲などの中毒症状を起こす場合があるため、出荷できなくなる。

また、茎数が多く、草丈が伸びているほ場では、うどん病の発生が予想されるので、病害虫発生予察情報等に注意し、適期防除に努める。

野菜

霜の恐れがある場合は、被覆等により霜害防止に努めましょう。
寒暖の差が大きい時期なので、こまめな温度管理を心掛けましょう。

トマト

1. 定植後の管理

- (1) 定植後、活着までに日数を多く要し、葉露が発生しない場合は、株元に手かん水を行う。その時に葉色が淡い場合はかん水を兼ねて液肥を株元に施用する。

■追肥肥料例	(2,100株/10a)			
肥料名	倍数	1株当たり	必要量/10a	回数
OK-F-1	700倍	300cc	水600ℓ: 肥料857g	3~4日おき

- (2) 根張りを良くするため、かん水は控えめに行う。
- (3) ハウス内の温度は昼間25℃前後で管理する。最低気温は15℃以上を目指し、夜間冷え込むことが予想される場合は、被覆資材や暖房器具等を設置し気温の低下防止に努める。
- (4) 1段花房の第4花の開花始めにトマトトーンを処理する。
- (5) わき芽は定植後に活着してから摘み取るが、できるだけ晴天の日に行う。

2. かん水・追肥

- (1) 試しかん水は、2段花房のトマトトーン処理後に1株1滴を目安に行う。
- (2) 本格的なかん水・追肥は、3段花房の開花期から行うこととし、1回当たりの追肥量は窒素成分で約0.5kg/10a以内とする。追肥による根焼けを防止するため各液肥の基準希釈倍数は遵守する。

メロン

1. 本畑の準備

- (1) 定植の2週間前に堆肥・改良資材・基肥を施用し、耕起・整地する。
- (2) 定植7~10日前に畦立て・マルチングを行い、地温（深さ15cmで18℃以上）及び土壤水分を確保しておく。

※雑草の抑制には、畦とマルチの隙間を少なくし、密着させると効果的。

2. 定植時の留意点

- (1) 定植時には、いわゆる「活着水」として、ポットに十分に温めた水を含ませると良い。また、活着水に液肥を入れると発根促進に効果的である。
- (2) 定植作業は朝から、夕方まで（地温が下がり始める前まで）とする。

(3) 根鉢を崩さないようにポットから出し、深植えにならないように鉢土はマルチ面より高く植える。株元に土を寄せない。

3. 定植後の管理

- (1) 活着後、生育の揃った子づる二本立てとする。

※事前に本畑を見回り、子づるの生育を確認し、揃った2本を残す。

この際、株元の葉や孫など、不要な側枝も除去し、整枝作業終了後は薬剤散布をすること。

(2) 定植後は最高気温28~30℃、最低気温12~15℃を目安に、トンネルの開閉、保温資材（保温キャップ等）の活用でこまめな温度・湿度管理を行う。

※最上位葉展開時、その6~7節上の花芽が分化開始する。

タカミの場合、子づるの5葉展開時から開花・結果までの管理が重要である。

タカミの場合は、子づるの5葉展開時から開花・結果までの管理が重要である。

タカミの場合、子づるの5葉展開時から開花・結果までの管理が重要である。

タカミの場合、子づるの5葉展開時から開花・結果までの管理が重要である。